

温かく支えてくれた人々

— 衝撃、の痛みに寄り添う心 —

発災後、すぐに全国各地の自治体や団体の職員、医師や看護師など医療を中心とした専門家たちが町に駆けつけ、昼夜を問わず復旧および支援に尽力しました。信号が消えた県道熊本高森線の木山交差点や惣領交差点では、緊急車両や支援物資の輸送車、道路や上下水道復旧の応援車両など一斉に集まる車両を、警察官が休みなく交通整理を行いました。それにより、被災者に支援物資が支障なく届けられました。

役場駐車場や避難者の多い避難所には、自衛隊がいち早く駆けつけ、おにぎりの炊き出しや搬送を行ったほか、入浴所の設置、倉庫への支援物資搬入および各避難所への運搬など、多くの業務で支援を行いました。

災害医療チーム(DMAT、JMATなど)や日本赤十字社などの医療チームも、益城町災害医療調整本部・救護所を設け、24時間体制で避難者の治療や体調管理をサポートしました。

避難者が最大約1万6,000人にも上った避難所の運営などに加え、生活再建支援に向けて新たに生じる業務に戸惑う町に、全国の自治体などから応援職員が続々と派遣されてきました。損壊家屋の被害認定調査や自宅・庭先避難者の巡回訪問など、多いときには300人を超える人たちが、さまざまな分野で活躍し、復旧と支援業務の推進に大きく貢献しました。

行いました。



益城町消防団は飯野分団、広安分団、木山分団、福田分団、津森分団の5分団から成る消防団で、役場機動班まで含めて総員618人が所属しています。4月14日の前震後、団員はいち早く自分たちで考えて行動し、昼夜を問わず救助活動などにあたってくれました。また、情報収集も行い、消防団への報告をしてくれたおかげでタイムリーに被災状況を把握することができました。ここまで大きな災害を想定して訓練を行っていなかったにもかかわらず、本当によく活動してくれたと思います。

一部では、消防団が何えなかった所もあるかもしれませんが。確かに年々減少する団員ではカバーできなかった所もあったかもしれませんが。今回のことを契機に、一人でも消防団に入り益城町を守りたいと思う人が増えてくれることを願います。またこれから、防災計画も大きく変わってくると思いますが、消防団もそれにあわせて変化していかねばならないと思っています。



益城町消防団
ほんだ かん
本田 寛 団長